TV 報道検証【報道特集】　報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 12 月 29 日

出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子
　　村瀬健介（中東支局長、イラク戦争の特集を取材）

検証テーマ： オープニング、佳子さまの誕生日、【特集】偽情報で開戦～イラク戦争 15 年

報道トピック一覧

・年末年始の帰省・出国ラッシュピーク
・日本海側中心に大雪・路面凍結により各地で事故相次ぐ
・長崎市雲仙市の踏切で列車と普通自動車が衝突
・神奈川県相模原市で道路にロープを張った男を逮捕
・エジプトのカイロ近郊のピラミッド近くで爆発、4 人死亡
・奈良県葛城市の犬の飼育施設が全焼
・奈良の薬師寺国宝薬師三尊像の「お身ぬぐい」
・佳子さまの誕生日
・東名あおり事故懲役 18 年の判決に検察側控訴せず
・茨城県つくば市でトラックにひかれ男性死亡
・川崎市の木造住宅全焼で 82 歳男性死亡
・【特集】相次いだ自然災害、年の瀬の被災地は
・【特集】偽情報で開戦～イラク戦争 15 年
・スポーツ報道

放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨

・オープニング：結論→特に問題なし

番組の冒頭で金平キャスターが「今年最後の報道特集です、この一年はあったことがなかったことにされた年でした。そんな中で決して忘れてはならないのは経験したことのない規模の自然災害でした、豪雨、地震、土砂崩れ、それぞれの被災地のそれからを取材しました、特集でお伝えします。」と発言していた。このシーンに当てられた時間は 19 秒で、放送法上は特に問題は見られなかった。

・佳子さまの誕生日：結論→特に問題なし

秋篠宮家の次女の佳子さまが 24 歳誕生日を迎えられ、天皇皇后両陛下への挨拶のため皇居御所を訪問されましたこと、今年 6 月イギリスへの短期留学から帰国した佳子さまは現在 ICU 国際基督教大学の四年生で、今年 9 月には国際情報オリンピックの開会式で英語を披露するなど青年皇族として様々な公務にも臨まれたとのことが伝えられた。このトピックに当てられた時間は 48 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】偽情報で開戦～イラク戦争 15 年

特集ではイラク戦争について 1641 秒に渡って取り上げられていて、VTR では以下に朱記したものが取り上げられていた。

【VTR１】
ナレ「2003 年 3 月に始まったイラク戦争。開戦の大義はイラクが隠し持っているとされた大量破壊兵器の存在だった。」
パウエル国務長官（当時）（翻訳・字幕）「サダム・フセインにとって世界最悪の殺りく兵器を保有することは最後のカードです。私が述べることは確実な情報源によって裏付けが取れています。」
ナレ「開戦に大きく踏み出すきっかけになったパウエル演説。その情報のほぼすべてが誤りだった。」
ナレ「当事者たちが、日本のメディアに内情を初めて語った。」
元 CIA 秘密工作員（翻訳・吹替）「大量破壊兵器なんてありません。皆無です。」
"ナレ「そして浮かび上がった一人のイラク人の存在。」
男性（翻訳・吹替）「これがカーブボールという男です。彼が完全に話をでっち上げたんです。」"
元 CIA 秘密工作員（翻訳・吹替）「彼はひどい詐欺師ですよ。」
ナレ「イラク戦争は今も続く混乱の引き金となった。なぜアメリカは一人のイラク人の嘘に乗って、あの戦争に突き進んで行ったのか。」
【VTR２】
ナレ「2003 年、2 月 5 日に開かれた国連安全保障理事会。会場に現れたのは、この後歴史的な演説をするパウエル国務長官だ。後ろには CIA のテネット長官を従えている。二人の長官の背後に硬い表情で座る男性がいる。ローレンス・ウィルカーソン氏。パウエル国務長官の演説を執筆した人物だ。」
ナレ「ウィルカーソン氏は、当時パウエル国務長官の首席補佐官を務めていた。執筆が始まったのは、演説の 1 週間前だった。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「パウエル長官が突然現れて、机の上に 48 ページの資料を放り投げました。『イラクの大量破壊兵器疑惑に関する資料だ。2 月 5 日に国連で演説するから、すぐに原稿の執筆作業を始めてくれ』といわれました。」
ナレ「その資料はイラク開戦を主張する政権の主流派が作ったものだった。そこには大量破壊兵器疑惑の数々が書かれていた。」
ナレ「元々イラクへの武力行使に慎重だったパウエル長官は、その内容に極めて懐疑的だった。パウエル長官の意を受けたウィルカーソン氏は、大量破壊兵器に関する情報を、確認したうえで、原稿を書き上げようと信頼する国務省のスタッフを数人連れて、CIA の本部に乗り込んだ。しかし。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「CIA 本部についた時、自分がインテリジェンスの素人で、丸腰であることに気が付きました。同行したスタッフも素人で、そんな私たちがテネット長官ら CIA 幹部たちと、対峙することになったんです。」
ナレ「疑念をぶつけても、CIA の幹部が間違いない情報だといえば、それ以上議論を深めようがなかったという。その CIA の情報とは、いかなるものだったのか、」
ナレ「アメリカ南西部、サンタフェ。砂漠の中にあるこの小さな町にイラク戦争に至る CIA の諜報活動の全容を知る人物が住んでいる。」
ナレ「元 CIA の秘密工作員、バレリー・プレイムさんだ」
元 CIA 秘密工作員バレリー・プレイム氏（翻訳・吹替）「当時、私は CIA の本部でイラク特命チームの諜報作戦の責任者をしていました。」
ナレ「イラクなど、世界各国の核開発の動向を、10 年近く追跡してきたプレイムさんは、CIA を取り巻く空気が、2001 年の同時多発テロ事件テロで大きく変わったのを感じていた。」

プレイム氏（翻訳・吹替）「戦争前夜の雰囲気に包まれました。９．１１の前には、イラクの大量破壊兵器なんか誰も興味なかったのに、」
ナレ「同時多発テロを受け、”テロとの戦い”を宣言したブッシュ大統領。アルカイダとの関係は薄いとされたイラク・フセイン政権への、軍事行動に傾いていく。」
プレイム氏（翻訳・吹替）「私たちは、戦争を正当化するための証拠集めに追われました。」
ナレ「攻撃の理由として浮上したのが、イラクが大量破壊兵器を保有しているという疑惑だった。だが、直接的な証拠は、見つかっていなかった。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「パウエル長官が懐疑的なのを感じた CIA のマクロクリン副長官は、1 時間ほど会議室からいなくなった後、長いアルミチューブを手に、これでどうだという感じで、戻ってきたんです。」
ナレ「CIA 側の説明では、そのアルミチューブは、2000 年に、ヨルダンで、イラク行きのコンテナの中から、押収されたもので、核開発の際、ウラン濃縮に使われる遠心分離機の部品だというのだ。押収されたアルミチューブが、ウラン濃縮に使われる部品かどうか、その官邸を依頼された人物がいる。核開発の専門家で、遠心分離機の研究では第一人者でもある、バージニア大学のヒューストン・ウッド教授だ。」
ウッド教授（翻訳・吹替）「エネルギー省のオークリッジ研究所に呼ばれて、『アルミチューブの鑑定をしてほしい』といわれたんです。2000 年ごろだったと思います。」
ナレ「鑑定の結果、押収されたアルミチューブは、遠心分離機の部品としては、使えないというものだった。アルミチューブの厚みがありすぎて、高速回転させる遠心分離機の部品としては、明らかに重すぎたのだ。」
"日下部（翻訳・吹替）「「どれくらいで結論に達しましたか？」
ウッド教授（翻訳・吹替）「15 分くらいです。明らかに違いましたから。」"
ナレ「にも拘わらず、そのアルミチューブが『核開発の証拠』としてウィルカーソン氏らに示されていたのだ。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「CIA の副長官は、これは遠心分離機の部品だと、説明しました。会議室にいた私たちは、これがイラク行きのコンテナから押収された実物か、と思いながらそれを手で触っていたんです。」
ナレ「CIA は大量破壊兵器の保有を裏付けるとされる根拠をほかにも持っていた。バグダッドの郊外、ジャアフルナッダーラに残されているこの工場。」
村瀬健介記者「エー当時、この場所で、生物兵器が作られているのではという疑惑がもたれていました。この場所がまさに、疑惑の中心地だった場所です。」
"ナレ「工場の責任者が、建物の中を案内してくれた。」
村瀬記者（翻訳・吹替）「この工場では、種を造っているんですか？」
工場責任者（翻訳・吹替）「そうです」
村瀬記者（翻訳・吹替）「他には？」
工場責任者（翻訳・吹替）「何も作ってません。これを作るのが私たちの仕事です。工場がはじまって以来、ずっと。」"
ナレ「CIA が当時持っていた情報は、農業用の種子精製工場に見せかけたこの建物が、実はトラックを使った移動式の生物兵器工場の基地だ、という内容だった。」
ナレ「その情報は、ドイツの情報機関からもたらされた。1999 年、ドイツに亡命してきたイラク人技術者が、あの種子精製工場で、西武兵器の開発が行われたと、証言したのだ。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「その情報は、イラク人技術者からとのことだったが、名前は知らされませんでした。本人は実際に生物兵器工場で働いていたという説明でした。しかも死傷者がでた漏洩事故について、とても生々しく、供述したというんです。」

ナレ「当時 32 歳だったイラク人技術者は、自らの経歴について、バグダッド大学を首席で卒業し、若くして、生物兵器製造の極秘プロジェクトを任されたエリートだと、説明した。さらに生物兵器工場で働いていたとき、炭素菌が漏れ、12 人が死亡する事故があったと、証言していた。長年、大量破壊兵器の証拠を掴めないでいたアメリカの情報機関は、色めき立った。」

ナレ「そして、このイラク人技術者には、カーブボールという暗号名がつけられた。」

ナレ「取材を進める中、そのイラク人カーブボールをよく知る人物と中東ヨルダンで会うことができた。会社の上司だったヒラール・アル・ドレイミ氏だ。手にしているのは、25 年前にバグダッドで行われた自らの結婚式の CD だ。その中に、カーブボールが映っていた。」

ドレイミ氏（翻訳・吹替）「彼がカーブボールです。名前はラフィード・アハメド・アルワン・アル・ジャナービ。私の指揮の下で、ジャアフルナッダーフの工場で働いていました。」

ナレ「しかし、カーブボールは、金銭の不正が発覚し、1995 年に、会社を解雇されていた。ドレイミ氏は、カーブボールの人物像について、こう話す。」

ドレイミ氏（翻訳・吹替）「彼は、泥棒で、うそつきで、変幻自在な男です。彼は会社を辞めた後、テレビ制作会社に転職しました。そこで機材を盗んで、イラクの裁判所から、逮捕状が出たんです。」

ナレ「バグダッドにいられなくなったカーブボールは、その後、ドイツにたどり着いていた。そこで作り上げたストーリーを売りこみ、ドイツの情報機関に囲われるようになったのだ。だが、裏付けが取れない話ばかりで、情報機関からの当初の信頼は、揺らぎ始めていた。CIA は、彼が証言した炭そ菌の事故を裏付けるため、生物兵器対策専門の医師を、ドイツに派遣した。血液に炭そ菌の交代が確認されれば、事故に居合わせたことが証明できるのだが、」

元 CIA 秘密工作員バレリー・プレイム氏（翻訳・吹替）「私が率いていた特命チームの医師が、血液採取のために、派遣されました。その医師は戻ってきたときに、とても動揺していました。カーブボールは二日酔いのような状態で、行動すべてが不審だったというんです。」

ナレ「検査の結果、血液から炭そ菌の抗体は確認されなかった。その医師が見たカーブボールは、極秘の国家プロジェクトを任されいたエリート技術者というイメージからは、程遠い人物だった。カーブボールに直接面会できた唯一のアメリカ人である医師は、CIA 内部で彼を信用すべきではないと、声を挙げていた。」

ナレ「だが、こうした現場の声が、ブッシュ政権の上層部に、届くことは無かった。すでに開戦に向けて舵を切っていた政権では、大量破壊兵器疑惑を、補強する情報だけが、評価されるようになっていた。」

ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「テネット長官は諜報機関の中でも、自分に都合がいい情報だけを選びとって、私たちに見せたのです。巨額の予算をもつ諜報機関から、これが証拠だといわれたら、反論することは、できないんです。」

"カサグランデ氏（翻訳・吹替）「この黒っぽい髪に、口ひげを生やしているのが、私です。」

ナレ「当時、国連の査察官だったロッコ・カサグランデ氏。パウエル演説の直前、彼は、イラクで大量破壊兵器を探していた。国連による抜き打ち査察は、CIA などから伝えられる極秘情報に基づいて、行われた。だが、なぜか養鶏場の査察ばかりが続いた。」"

カサグランデ氏（翻訳・吹替）「私たちは、たくさんの養鶏場を査察しました。なぜなら、ニワトリは半円筒状の小屋で飼育されていて、衛星からは、ミサイルの格納庫のようにも、見えたからです。」

ナレ「不毛な査察を続けていたカサグランデ氏たちは、自分たちのことを自虐的に、弾道チキンファーム査察チームと呼んでいた。

ナレ「仲間内では、その名前をプリントした T シャツまで作られた。」

カサグランデ氏（翻訳・吹替）「ニワトリを追いかけるのに、うんざりしていました。私は４回。他の査察官が何回行ったか、知りません。」
ナレ「結局、CIA などからの極秘情報は、全て誤りだった。パウエル国務長官の国連演説の前夜、アメリカの国連代表部ビルの最上階にあるカフェテリアを、安全保障理事会の議場の見立てて、リハーサルが行われた。初めて演説を通しで読み終えたパウエル国務長官は、CIA のテネット長官を見据えて、こういったと言う。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「『ジョージ（テネット長官）この演説の内容に責任を持てるな』、とテネット長官は、『国務長官、私は国連演説の心配は全くしていません。日々の議会対策の方が心配なくらいです。』と言いました。するとパウエル長官は、『よしだったら、明日の演説で私の真後ろに座って、カメラに写ってもらうぞ』と言いました。」
ナレ「それは、CIA が情報の確実性を保証していることを示すための、演出だった。ちょうどそのころ、ドイツの情報機関との窓口になっていた CIA の欧州部長が、テネット長官に電話をかけていた。」
元 CIA 秘密工作員バレリー・プレイム氏（翻訳・吹替）「欧州部長は、パウエル演説の前夜、『カーブボール情報はウソですから、絶対に使わないでください』と伝えました。3 日も徹夜状態だったテネット長官は、『大丈夫だ、心配するな』と言って、電話を切りました。」
ナレ「2003 年、2 月 5 日、パウエル国務長官の演説が始まった。あのアルミチューブが、フセイン政権の核開発の証拠として、取り上げられた。」
パウエル国務長官（翻訳・字幕）「鑑定した全ての専門家は、『ウラン濃縮の遠心分離機に使えるもの』と認めた。」
ナレ「アルミチューブを鑑定したウッド教授は、この演説を聞いて、」
ウッド教授（翻訳・吹替）「事実と全く違います。顔や腹を殴られたみたいで、愕然として、『ああ、戦争になるんだ』と思いました。」
"ナレ「CIA 本部で対イラク諜報作戦の指揮を執っていたプレイム氏は」
プレイム氏（翻訳・吹替）「よく覚えています。生放送を CIA 本部で見ていましたが、みんなテレビにくぎ付けでした。」"
"ナレ「そして、このカーブボール情報、」
パウエル国務長官（翻訳・字幕）「彼（カーブボール）は生物兵器が製造されている現場にいた事故があった時にも、現場に居合わせ、そこで 12 人の技術者が死亡した。」"
プレイム氏（翻訳・吹替）「隣にいたカーブボール担当の女性職員に『一体何が起きているの？　』って聞いたんです。彼女はおびえた顔をして、『わからない』って言っていました」
ナレ「パウエル演説から 3 日後、国連査察官のカサグランデ氏たちは、あの種子精製工場の抜き打ち査察に向かった。到着すると、目の前には、人気のない倉庫のような建物が、並んでいた。」
カサグランデ氏（翻訳・吹替）「建物のシャッターが少し開いていて、私はよじ登るのが得意だったので、そこから、建物の中に入りました。」
ナレ「査察官の中で最も、若かったカサグランデ氏が、建物の中に、一人で飛び込んだ。目の前には埃が舞い、虫の死骸も散らばっていた。そこは厳格な管理が必要な細菌培養に、最も不向きな環境で、生物兵器工場でないことは明らかだった。」
ナレ「それでも、アメリカは、イラク戦争に踏み切った。パウエル演説を執筆したウィルカーソン氏は、戦後になって初めて、演説の根拠となったカーブボール情報が、ウソだったことを知らされた。」
ウィルカーソン氏（翻訳・吹替）「ひっくり返りました。冗談でしょう。これが唯一の情報源で、しかも暗号名がカーブボール”くせ球”だなんて」

"テロップ「カーブボールが住んでいたアパート」
ナレ「ここはカーブボールが住んでいたドイツ南部にあるアパート。5 年ほど前に、この部屋を出た後、消息は分かっていない。」"
ナレ「イラク戦争の大義など、そもそもなかった。元 CIA のプレイム氏は、15 年経った今でも、アメリカ政府の犯した過ちの深刻さを感じている。」
プレイム氏（翻訳・吹替）「カーブボール情報は怪しいという警告はいくつもあったのに、とにかく、つじつまを合わせ続けたのです。なぜなら、カーブボールしか頼れる情報源が無かったからです。何世代にもわたって後悔するであろう悲惨な過ちで、アメリカ史上最悪の外交政策でした。」
　スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられていた。
膳場「取材した村瀬記者と中継がつながっています。あの改めて根拠のない戦争だったと、突き付けられましたけれども、イラク戦争から 15 年たった今、あの村瀬さんが、取材をしようと思ったのは、なぜだったんでしょうか。」
村瀬記者「はい、えー中東取材の中では、イスラム過激思想とテロの取材が大きなウェイトを占めるわけですけど、彼らがテロの正当化をする際に必ず出てくるのが、このイラク戦争のことです。えー今回の取材はイスラム過激思想に染まる人々が何に怒っているのかを知るためには、イラク戦争の原点を探ることが必要ではないかと考えたことから始まえりました。」
日下部「それにしてもですね、これだけの疑惑、疑念がありながら、なぜ戦争を止められなかったんでしょうか。」
村瀬記者「まず一つは、イラク開戦という政権トップの意思が、明確で、いわば忖度のような状況が生まれていたということも、あると思いますが、もう一つ、これはウィルカーソンさんが解説してくれたことですけども、当時は誰もが、まさか大量破壊兵器が見つからないとは思ってもいませんでした。ですので、疑惑の根拠が少々間違っていたとしても、最終的に大量破壊兵器が見つかりさえすれば、大した問題にならないと思っていたということもあると思います。」
金平「あの村瀬さんね、今年はあのパウエル長官に実際に会ってですね、証拠のことを話してみたら、騙されたっていうふうにですね、非常に怒っていたことを記憶してるんですけども、考えてみますとですね、今のトランプ政権も、その同じ危険性ですね、諜報機関の情報に頼り切っているっていう、そういう危険性を抱えていると思えるんですけども、そちらで取材していて、どうですか？」
村瀬記者「はい、今回の取材に応じてくれたプレイムさんや、ウィルカーソンさんが口をそろえて言っていることなんですけれども、今のイランを巡る状況が、イラク開戦前の状況によく似ているということです。一つには、イラク戦争を主導したネオコンと呼ばれる人たちが再び政権中枢についていること。えーそして最近になってイランがテロ組織を支援しているというような、主張、さかんに主張されるようになっていること、いうことをイラク戦争の前によく似ているというんです。イラク戦争では、日本が、アメリカの武力行使をいち早く支持しました。えーその検証については、わずか 4 ページの文章が公表されているだけです。フェイク情報があふれる現代で、日本が正しい判断を下すためには、イラク戦争の検証の議論をより深める必要があるのではないかと思います。こちらからは以上です。」
　放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨
　特になし

検証者所感

・オープニング

金平キャスターは「今年最後の報道特集です、この一年はあったことがなかったことにされた年でした。そんな中で決して忘れてはならないのは経験したことのない規模の自然災害でした、豪雨、地震、土砂崩れ、それぞれの被災地のそれからを取材しました、特集でお伝えします。」と述べていたが、「あったことをなかったこと」とするのも問題であるが、「ないことをあること」とするのも問題であると思う。

・【特集】偽情報で開戦～イラク戦争 15 年

村瀬記者は「イラク戦争では、日本が、アメリカの武力行使をいち早く支持しました。えーその検証については、わずか 4 ページの文章が公表されているだけです。フェイク情報があふれる現代で、日本が正しい判断を下すためには、イラク戦争の検証の議論をより深める必要があるのではないかと思います。こちらからは以上です。」と述べていたが、そもそも日米関係においてアメリカの外交方針に確固たるものが定まっていた状態で日本に判断の余地はあったのだろうか、甚だ疑問であった。

また、村瀬記者「一つには、イラク戦争を主導したネオコンと呼ばれる人たちが再び政権中枢についていること」と「ネオコン」について言及しているが、そもそも「ネオコン」というのはいかなる人々を指しているのか、彼ら「ネオコン」はどういった思想遍歴を経て、内政や外交でどういった主張をしているのか、という点については全く触れられておらず、単なるレッテル貼りに堕しているような印象を受けた。